エッセイ

「行間」を読むと「舞台」が見える

知的財産学部　助教授　椋　平　　淳

私が「演劇をしている」という話をすると、たいていの学生さんはとても驚きます。無理もないですよね。皆さんからみれば、私は単に英語科目の教員ですから。でも、もともとの研究分野は、欧米や日本の演劇です。また、研究だけでなく、実際の上演にも関わっていて、演出やプロデューサーの仕事もしています。

舞台作品を創るために重要なのは、本、つまり「戯曲」を読む力です。舞台上でセリフを吐く俳優だけではなく、稽古現場を仕切る演出家や、企画全般の責任者であるプロデューサーも、戯曲の「潜在力」を読み取れなければ、魅力ある作品を創ることはできません。その潜在力を読み取る際に求められるのが、「行間を読む想像力」です。

演劇の戯曲では、登場人物の心情や動機が、小説ほどには詳しく書かれません。たとえば、２人の登場人物が出会った際、お互いに一言ずつ「やあ」と言ったとします。この場合、２人とも相手を歓迎しているのか、一方が実は相手を避けているのか、あるいは両方とも内心は困惑しているのかは、このセリフだけでは判断できません。たとえ前後の会話をたどったり、さらには全編を読み返してみても、セリフやト書きを表面的に理解するだけでは、欲しい情報が得られないこともしばしばです。それでも、その人物の心の奥底が観客に伝わるように舞台化しなければ、演劇は成立しないのです。とくに、激しいアクション芝居ではなく、会話を主体とする作品なら、なおさらそうです。

したがって、私が上演にむけて戯曲を読むときは、表面的な意味だけでなく、書かれていない「行間」も読み込みます。つまり、なぜその人物がその瞬間にそんな言葉を吐いたのか、書かれたセリフをヒントにして、内面的な心の流れや動機を想像するんですね。対話の場面だと、お互いの感情が連鎖反応を起こしてやたらと盛り上がるとか、逆に、一方に別の動機が芽生えてセリフのトーンが変化するとか、そういう劇的状況を推測して、それが表現できる演技を俳優に求めるわけです。俳優がその人物の内面を自分のものにできたとき、セリフの棒読みが解消され、奥深い演技になるわけです。

この「行間を読む」という行為は、なにも演劇に限ったことではないように思えます。たとえば、どこかの作業場で、いろいろな原材料を並べて眺めながら、その配合や処理の方法をあれこれ想像することで、これまでにない工業材料が発明されることもあるでしょう。新たな製品が、「社会」という舞台に出るわけですね。というわけで、なにかの「行間を読む」、つまり「潜在力を見出す」というのは、いろいろな「ものづくり」の場面に応用できる視点だろうと思います。